

山口県トライアスロン競技監督

山口県トライアスロン連合

理事 福村 航

理事 藤谷 真夕

## 第77回国民体育大会いちご一会とちぎ国体の結果報告について

### 1 開催日時場所

10月2日(日)、戸田調整池周辺特設会場

### 2 当県選手成績

#### (1) 成年女子

選手:古谷 陽弥

成績:順位 82位/86人出場

時間3時間00分41秒(スイム28分26秒、バイク1時間26分37秒、ラン1時間02分41秒)

#### (2) 成年男子

選手:村中 大輔

成績:順位 63位/90人出場

時間2時間08分23秒(スイム25分28秒、バイク1時間03分56秒、ラン36分)



### 3 内容

#### (1) 成年女子

レース当日、朝は肌寒いくらいで気温は21.44℃、水温に至っては17.9℃とかなり低く、ウェットスーツ着用となっても低体温が懸念されるコンディションでした。

今回国体初出場となる大和大学4年生の古谷選手は、コロナ禍の中で大学生活を過ごしたこともありトライアスロン大会出場回数は今回でまだ通算5回目であるが、学生生活の集大成として今回の大会に臨みました。ご家族も山口県から応援に駆けつけて、本人大変心強く思ったそうです。

水温は冷たいものの、本人は問題ないと元気な様子でした。

スイムスタート後直ぐに集団となり、本人は「少々詰まって泳ぎにくかった。」そうですが、中位以降でレースを進めました。

元気な姿でスイムアップし、73位あたりでバイクに移りました。

順調にバイクを走行するも早くも二周目で大幅に順位を落としました。後から分かったことですが、スローパンクで一周走った後に、いよいよ空気が抜け切り停車寸前のところで運良くホイールエリアにたどり着き、ホイール交換して比較的短時間のロスでレースに復帰することが出来たということです。

パンクによるタイムロスで、80位ぐらいまで順位を下げたものの元気に8周回を終え、ランに移りました。

段々と気温が上がっていくなかで、家族や藤谷監督の応援を受け、4周回10キロを走り切り3時間00分41秒、82位でフィニッシュしました。本人曰く「得意のスイムでもう少し前でレースを進めたかったができず、タイムも満足出来なかった。」とのことでした。バイクでのパンクトラブルで5分以上はロスしており、復

帰後、同行する選手が少なく単独走を強いられる場面が多く苦しいレース展開となりました。

古谷選手は、競技を続けられるかまだ見通しは立っていないものの、来年一年間は助産師の免許を取るためにもう一年間学生生活を続けるので、今回の国体出場の経験、反省をもとにバイク、ランを強化して上位を目指してもらいたいと思います。

## (2) 成年男子

午前中の女子のレース後、正午すぎからの男子のレースでは気温がかなり上昇し、33.44℃と夏を思わせるような暑さとなったものの、水温は冷たいままで、19.22℃とウェットスーツ着用のレースとなりました。

今回国体4回目の出場となる村中大輔選手は、体脂肪率6%とかなり身体を絞っているためランニングでは有利ですが、水温の低いコンディションは苦手で、同様のコンディションでの岩手国体の苦戦がトラウマとなっており、レース前の不安を払拭するためホットクリームとワセリンを大量に身体に塗り込み悪コンディションに備えました。

スイム一周を終え、82位あたりの下位で通過し、二周目も順位をキープして何とか無事にスイムアップしました。

トランジションで手間取り1分近くタイムロスするも、他の選手と競り合いながらバイクパートに移りました。

前の集団とは1分近く離れており、単独走を強いられる場面が多く苦しい展開となりました。何とかバイクで順位を上げたいと思っていましたが、心肺が急に200近くまで上がる症状が出て思うように踏めなかったそうです。

それでもバイクで数人を抜き、8周を終え得意のランへ移りました。ここから何人抜けるか楽しみであり声援にも力が入りました。夏に戻ったような暑さもお構いなし、村中選手には前の選手をパスすることだけに全集中して走っていました。

ラン10キロで20人近くを抜き、ランラップも20位以内と面目躍如、本来の走りを見せてくれました。

村中選手は今回、コロナ禍で自衛隊や米軍基地のプールが使えない時期があり、スイムの練習不足をかなり心配しており、また苦手な低水温で完泳できるか不安そうでしたが、何とか克服し60位台の成績に結びつけることができたのは、彼の長年の経験と責任感の賜物だと考えます。

村中選手も30歳代後半になり、本人は競技を続けながら、次世代の育成、強化を共に考えたいと言ってくれているので、今回コロナ後遺症で出場できなかった同志社大学の福寿弘海選手、来年大学一年生となる予定の山根慧希選手も含め、現在の候補選手のサポートを継続することはもちろん、コロナ後を見据えて開かれた練習会等を多く開催し、男子、女子共に有望選手の発掘、育成を行っていく必要があると痛感しました。